慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・B・マトロシーロヴァ著 三浦和男訳 認識と社会 : 17-18世紀の哲学史から
Sub Title	Н. В. Мотрошилова, Познание и общество : из истории философии XVII-XVIII веков, Москва
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.9 (1975. 9) ,p.705(59)- 706(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19750901-0059
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750901-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

H・B・マトロシーロヴァ
三浦和男訳
『認識と社会
——17-18世紀の哲学史から——』

西ヨーロッパの精神史に関する研究は，従来おもに西ヨーロッパ自身で進められてきたといっていいだろう。これに対してわれわれが，これについてのソ連での研究成果に出あうのは，大体科学アカデミーを中心にして編集された教科書的なものを通してであり，現役の研究者の学位論文が，いわば生の形で翻訳される機会はそう多かったとはいえないだろう。西ヨーロッパの研究はそれが自己の過去，自己の形成過程に直接かかわるものであるために，当然のことだが内在的であるのに対し，ソ連での研究は階級的視点を強くおし出した，超越的なものがしばしばみられた。この種の研究に不可欠な内在的分析や理論構造の分析が，マルクスやエンゲルスの断片的引用をもってかえられることが多かったのである。だが，この著作をよみすすむうち，この時代についての西ヨーロッパでのよき成果，たとえば，ボルケナウ（「封建的世界像から近代的世界像へ」水田洋他共訳，I II・みすず）やウイレー（「17世紀の思想的風土」深瀬基寛訳，創文社）などを想いうかべ，比較しながら読んでいる自分に気付いた訳だが，そのこと自体，著者の，西ヨーロッパ精神史に真正面から，内在的に立ち向う姿勢なしにはありえないことであろう。丁度，ヨーロッパを絶対視し，ヨーロッパを追いかけ，模倣することによって近代化をおしすすめてきたわが国が，ようやく自己確認の必要に迫られて，近代日本にとってヨーロッパとは何なのかというように問題をたてなおし始めたのと同じく，ソ連においても，「ブルジョア的」という批判を投げつけるだけでなく，一体，ソ連の社会主義にとって，西ヨーロッパの精神史はいかなる意味をもっているのか，という問題が，内在的にとりくまれているといえよう。

この問題に対する著者の問題意識はきわめて明確であると同時に限定されたものでもある。その問題意識は，知識や認識の社会的規定性，階級性という一方での主張と，知識とくに科学の真理の自律性という他方での主張との間の矛盾をいかに理解し，いかに解決することができるか，という問題である。つまり前者の立場に立てば，一切の認識は社会的関係によって制約されるのであるから，その自律性が否定され，逆に後者の立場に立てば人間の知識はそれ自体として展開するものであるから社会的規定性の方が否定される。現在，われわれの社会で，原爆や公害の問題に関連して科学の社会的責任が問われたり，あるいは逆に科学の自己目的性，自律性が再度強調されたりしている状況をみれば，この問題の現実性，深刻さはすぐ想像できるだろう。著者はいう，「自律的科学や『純粋』で『内在的な』真理といった構想が，現実の科学的＝認識的経験と，これほどまで原理的に，これほどまでに険しく，これほどまでにきっぱりと分離してしまったことはこれまでに例がなかった」（5頁）。

もちろん，ここでは著者は20世紀の西ヨーロッパの哲学の状況について語っているのだが，もしソ連の社会主義が西ヨーロッパと，それが生み落した資本主義をのりこえたところに成立しているものであるならば，マルクス主義哲学もまた，このような状況をブルジョア社会に不可避なものとして理解し，説明し，かつ適切にのりこえることができるのでなければならない。すでにのべたように，ソ連においても階級的視点からただちにある抽象度の高い理論を断罪しようとするいわば素朴唯物史観ともいうべきものがしばしばみられたとすれば，それはソ連においても，上にのべた20世紀西ヨーロッパの哲学の矛盾が確実にはのりこえられていなかったからだということになる。したがってこのような著者の問題設定（知識の階級的規定性と自律性という二律背反をどう理解するかという）は，政治目的を優先させる哲学の立場への批判も同時に含んでいるのであって，むしろそれがこの著書の魅力であり，生きた研究書である証しでもあるといえよう。そのような批判は明らさまには語られていないけれども，この研究の課題が，「現代の学説にとっても，けっして単に歴史的にはとどまらない重大な関心事をなしている」（350頁）という発言からも，裏づけられる。要するに，唯物論哲学は西ヨーロッパ精神史のブルジョア性（それは殆ど同義反覆でしかない）を指摘するだけではまったく不十分であり，その内包する矛盾を具体的に解明し，説明し，のりこえるのでなければ，決して哲学史の先端に立つ資格をもちえない，という明晰な自覚がここにみられるのである。これがこの著者の問題意識であり，この問題意識は研究対象そのものの分析の中に，見事に一貫している。

それでは著者はこのような問題の分析を，どのよう

な研究対象に限定するのか。それは人間の認識の領域，および人間の本質についての議論の領域であって，社会＝政治思想の領域は一応枠外におかれている。その意味でこの著作は社会思想史的というよりは哲学的な本であるといえよう。

著者によれば17・18世紀の哲学者たちは，人間はそれ自体の本性からして「自由で，理性的で，能動的な」存在である，という確信を共有していた。実はこのような確信自体，社会的＝歴史的に制約されたもの，つまり上昇期ブルジョアジーの生活体験の理論的表象としてあったのだが（その分析の部分は，マニュファクチュア時代の哲学に関するボルケナウのブリリアントな叙述に比べると平凡な感じは免れない），17・18世紀の思想家たちはこれを人間そのものの内在的な本質とみたのである。これら哲学者たちは，この理性，人間に内在する本性を「純化」しようとこころみる。それは社会によって後天的に与えられたものではなく，人間が生来もっている内的本性なのだから，それ自体の中に動因をもつものでなければならない。著者はここに，西ヨーロッパ精神史に根づよくみられる知識や科学の自律性に対する信仰の歴史的源泉をみてとっている。

だが，この純化の努力それ自体が，もう一つの認識の問題領域である社会的＝政治的＝実践的領域の問題を哲学者たちにつきつける。この領域もまた人間存在や，したがって認識のきりはなすことのできない分野だとすれば，このよりどろどろした，より理性の規則にはおさまりそうもない領域は，一体この純化された「理性」とどのような関係にあるのだろうか。哲学者たちが誠実であり，そしてまた人間の内的理性の純化につとめればつとめるほど，そして知的作業の領域での分業が未展開であればあるほど，この問題はますます鋭くつきつけられる。17・18世紀の哲学者たち，デカルトやスピノーザや，ベーコンやホッブズを先頭とする哲学者たちは，それぞれによってその対応の形態は異るが，この二つの領域を区別し，分離する，という形で解決しようとしている，と著者はいう。この時代の哲学者に共通の「神」の意識も，またこの内的「理性」と外的世界の分離から生ずる。なぜなら，理性が社会に由来するものでない以上，それ自体として完全な「理性」の根拠は神の中にしかないからである，と著者はいう。このようにして17・18世紀の哲学者は，認識を，純粋に自律的な「理性」の領域と，社会的実践的な領域とに分離した。だがヘーゲル流にいうならば，われわれはこの分裂こそが人間存在の，本来的統一性，全体性の実現の形態であった，ともいえよう。いいかえれば「認識」と実践的社会生活とは，分裂という形でその統一性を保持した。その意味でこの分裂した両極は相互補完的なものである。

ふつう，唯物論と観念論の対立の出発点として画かれるこの時代の哲学を，知識の社会的被制的性と内的自律性の関係としていいかえただけでなく，そのような問題の立て方そのものの根拠や意味に迫ろうとするこの研究の方向が，もし訳者のいうとおり「単なる例外ではない」（370頁「解説」）とすれば，たしかにその点でもソ連での研究の前途には希望がもてる。なぜなら，唯物論か観念論かという平板な二者択一では唯物論は，いや精神が先ではなくて物（生産関係といいかえてみても同じことだ）の方が先だ，というような，単なる観念論の裏返えしにすぎなくなり，能動的な，人間存在の本来のあり方，ダイナミックな姿はこのような哲学ではとらえられようもないからである。一方で科学や知識の自律の主張に対抗し，他方でイデオロギー優先の風潮に抵抗するためには，まず著者は「認識論的ロビンソン」（8頁，社会から孤立して孤独かつ自律的に認識をおこなう主観という発想）を批判することからはじめなければならなかったといえよう。これこそが，その対極としてイデオロギー優先の風潮を生み出すからである。

（岩波書店，1974年11月刊，B6判，1800円）

野地　洋行（経済学部教授）